

昨年3月にサダーカを立ち上げ、1年が経ちました。非常に残念なことにシリアの状況が好転する兆しは見えてきません。主食であるパンの価格高騰が続き、食糧自体がいつまで続くのかという不安感に、比較のお金を持っている人も、近い将来のためにお金をなるべく使わないようにという気持ちが働いているとも友人は言います。

一方で、その友人は、シリア人同士が助け合い、これまで以上に団結してこの苦難を乗り越えようとしているとも言います。家を止む無く離れる際に家財道具などは周りの人たちに配っている人が多いようです。彼らのほとんどは泥棒や軍の略奪などにあうのならば、むしろ隣人に使ってもらった方がよいと思っているのだそうです。

\*\*\*\*\*

■目次

1. アハバールフロムヨルダン 《ヨルダンからの報告》

- (1) ヨルダン、アンマン地域におけるシリア人難民家族の家庭訪問から  
(報告：サダーカ副代表 長島 麻奈)
- (2) 認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーンヨルダン事業レポート  
(報告：プロジェクト・コーディネーター 持田 雄太郎)
- (3) シリア難民家庭を訪問して  
(報告：早稲田大学文学学術院助手 赤司 千恵)
- (4) 寄付の状況

2. アハバールフロムニッポン 《日本での活動の報告》

- (1) 4月のイベントのお知らせ

\*\*\*\*\*

1. アハバールフロムヨルダン 《ヨルダンからの報告》

(1) ヨルダン、アンマン地域におけるシリア人難民家族の家庭訪問から

サダーカ副代表 長島 麻奈

2013年2月10日から21日にかけて、ヨルダンの首都アンマン地域に避難してきているシリア人難民17件の家庭訪問を実施しました。経済・健康・教育状況等のアセスメントを行うのと共に、状況によって資金と物資支援を実施。又、難民となったシリア人の人々がシリアでどのような体験をし、ヨルダンへ避難し、そして、ヨルダンでいかにして生活しているかについて聞き取りを行いました。このレポートはその要点をまとめたものです。

## ～「国内避難民」から「難民」へ、安全な場所を求めて～

ヨルダンへ逃れてくる経緯、なぜその決断をし、「難民」となるに至ったかを聞きました。

多くの人々がまずは出身地域内を、少しでも安全な場所を求めて転々としていることが明らかとなりました。ホムス出身のある家族は、自宅が破壊された為、まずは同じホムス内の親戚の家に身をよせ、親戚の家も危険が迫ってきた為に街の郊外へ移り、ドアも窓もない建設中の建物の中でシーツ等を張って生活し、冬になって暖がとれなくなった為にダマスカスを経てヨルダンへ来た、と言います。親戚や地下室、空き家等を転々とし、最終手段としてヨルダンへ逃れてきた家族の例は、ダマスカス郊外の戦闘が激しい地域出身者からもうかがえました。

安全性の他に国外へ逃れるきっかけとなるのは怪我です。実際に自由シリア軍等として戦闘に参加した為であれ、戦闘に巻き込まれて怪我をした為であれ、怪我人として病院へ運び込まれ、治療を受けていると、シリア政府軍がやってきて、怪我人を反政府者として逮捕する事例が多々あるようです。薬や設備等が不十分な為、適切な治療が受けられないという現状の他に、このような政府軍に対する恐怖からも、怪我をした、特に男性にとつては、国外へ逃れる大きな理由となるようです。

又、戦闘が激しい地域では子どもが学校に行くこともできず、2年も学校へ通っていないという子どもたちにも出会いました。子どもの教育と、戦闘の中で生活せざるを得ない子どもたちの安全と精神状態への考慮も、シリアを離れる理由の一つであることが分かります。

## ～UNHCRへの登録～

今回聞き取りを行ったアンマンに住むシリア難民の多くはUNHCRに登録を済ませている、或いは近日中に登録をする予定であることが分かりました。登録を済ませている人は皆、毎月食料の配布のクーポンと、家族の大きさと経済状況に合わせて月100～180JD（約13千円～2

3千円）の支援金を受け取っています。又、ヨルダンの国立病院における治療も無料で受けることができます。しかしながら、タクシーが主な交通手段であるアンマンにおいて、食料クーポンの受け取りや、病院への交通費の支払いが難しいと訴える声も多く耳にしました。

聞き取りを行った中では唯一、シリア北部のハッサケ出身の若い夫婦が「UNHCRに登録するとシリアへ戻れなくなる」と誤った認識を持つ為に登録していませんでしたが、ハッサケ郊外の比較的安全な村の出身である彼等は仕事を求めてヨルダンへやってきた、どちらかと言えば経済移民でした。一方、本来、パスポートを持たずにヨルダンへ入国した、いわゆる密入国者であるシリア人は、国境近くにあるザアタリ難民キャンプに入り、ヨルダン人の身元引受人や医療上の都合等の理由が無い限りアンマンに住むことは許可されていません。夫の治療の為にキャンプからアンマンへ移り住んだ家族は、UNHCRへ登録に行ったものの、書類不備の為に登録を拒否された等、難民支援組織とヨルダン政府間の調整不足かと思われる事態も生じています。

## ～分断された家族～

住んでいた地域を離れざるを得なくなったシリア人の中には、家族が分断されてしまった例も確認されました。例えば怪我の治療の為にヨルダンへ密入国したムハンマド氏（仮）の妻子は、その後シリアからエジプトへ逃れました。一方で、ムハンマド氏はシリア国内でパスポートを発行していなかったが故に密入国の方法を用いてヨルダンへ入国しており、ヨルダンのシリア大使館に赴いた場合は即座に捕まって強制送還されると言われている為に、パスポートを作ることができないでいます。彼はエジプトの家族のもとへ行くことを希望しているものの、現状のままでは叶いそうにありません。

公式にヨルダンへ入国し、2週間前にヨルダンで赤ちゃんを出産したゼイナブ氏（仮）は、夫と他2人の子どもと共にアンマンに避難してきていますが、実は4歳になる娘サラ（仮）を未だシリア国内にいる母親のもとに残してきていると言います。サラの出生登録がスムーズに行かず未登録の状態となっていた為にパスポートを発行できず、一緒に連れてくることができなかつたそうです。他にも、まだ夫たちがシリアに残っており、女性たちと子どもたち、そして年配の両親たちのみでヨルダンへ避難している、という家族にも会いました。

## ～仕事～

ヨルダンにおいて、シリア難民は法的には働くことが許されていません。インフォーマルセクターにおいて非公式に働くことはできるものの、その仕事の多くは建設業、レストランやカフェ、街中の物売り等、肉体労働かつ低賃金です。聞き取りを行った家族の中の若い男性たちは、このような仕事についている人、或いは日雇い労働をしている人もいる一方、手に職を持ちながらもシリア人であるが為に働くチャンスのない男性たちもいます。

フィラース氏（仮）は調理師の資格と経験を持ち、紛争以前はシリアやレバノンの一流レストランで仕事をしてきましたが、ヨルダンのレストランで仕事を探しに行くと、シリア人だと分かった途端に渋い顔をされると言います。ヨルダンで何もせずに時間を潰していることが辛い、と嘆きます。アフマド氏（仮）は、ダマスカス郊外で工場を持ち、家具職人としてシリア国内のみならずヨルダンにも商品を納めてきましたが、攻撃で工場を失い、家族と共にヨルダンへ逃れてきました。1500 J D（約 20 万円）の頭金があれば新たに家具作りを始められると言います。「支援組織にお金を頼むのはまるで子どものようなのでしたくない。一方で、お金を借りることができれば、利益から徐々に返していけるし、4 人の子どもを学校に行かせることもできる。しかし、難民という立場の自分にそんなお金を貸してくれる組織が見つからない。」と言います。

## ～教育～

先にも述べたように、シリア国内においては、治安上の問題から、既に2年近くも学校へ行くことができないでいる子どもたちがいます。ヨルダンへ避難してきているシリア人も多くが子どもを学校へ通わせていますが、2年もの間、学習に空白が出来てしまっていることから、そしてヨルダンとシリアの進学年齢の違いから、子どもたちの学習が遅れてしまっていることを大変心配し涙する母親にも出会いました。必要書類を揃えるのが非常に大変だったという声を聞く一方、ヨルダン政府の政策のお陰で国立校においては教科書代も払わなくて良い等の措置に対し、感謝の声も聞きます。しかし、地域によっては通学バスに代金がかかるなど、やはり子どもを学校に行かせる余裕のない家族がいるのも現状です。現に先の家具職人のアフマド氏の10台前半の2人の息子たちは、通学バス代を払えないどころか、家賃も払えない父親に代わり、単純日雇い労働の仕事に着いて家計を支えています。

## ～紛争以前・現在・そしてこれからのシリア～

他国に避難をするシリア人の中には、当然のことながら、シリア国内で何らかの困難な状況に直面してきた人々が多くいます。中にはシリア政府軍に家を破壊され、怪我を負わされ、拷問を受けて避難してきた、というシリア難民の人々もおり、そういった人々からアサド政権に対する批判の声を多く聞きました。

私たちが聞き取りを行ったそのような人々は紛争が始まる前から、政権に対し大きく分けて二つの面から不満を抱いていたことが分かりました。

まず、いわゆる中流階級以上のある程度教育を受けている人々は、人権・発言の自由等が保障されていないこと、腐敗が蔓延していてアサド政権関係者等とのいわゆる『コネ』が無いと就学、就職、留学等のチャンスが巡ってこないことを不満要因として挙げました。それ以外の人々は自らの経済的貧しさが政治体制の問題に起因していると考えていました。

また、現在のシリア国内における治安の問題に関しては、自由シリア軍が存在する地域がシリア政府軍の攻撃対象となると考えていることが分かりました。アンマンへ避難してきているシリア人の親戚には実際に自由シリア軍として戦っている人もいると推測され、シリア国内における紛争激化の要因として自由シリア軍や反政府勢力を批判する声をあまり聞くことはありませんでした。

ファイサル氏（仮）は、自由シリア軍が潜んでいた学校のガードマンをしていたとの理由で拘束され、主に電気ショックによる拷問を受け、片足の膝下切断とその他の足の指を失う結果となった、と語りました。紛争以前は特に積極的に政治について考えるような人ではないと思われる彼のような人が、このような悲惨な経験を経て、アサド政権に対する強い反発心を抱くようになる例は他にも多数あると考えられます。

例えば、ダマスカス大学で学んだ後、有名な製菓会社に会計士として勤め、その後、紛争発生とほぼ同時期に

兵役に就いたアブドゥ氏（仮）は、フェイスブック等を通して若者の活動家たちの同行を監視、デモの呼びかけ等を上司に報告する業務に携っていた、といます。しかし、状況が悪化するに伴い、又、若者や市民が政権側から受ける暴力等を目の辺りにするにつれ、徐々にアブドゥ氏は「自分が悪の側に立っていると感じるようになった。」と語りました。政府の手助けに携りたくないと決心した彼は友人たちの協力を得て、フェイスブックやYouTubeに「戦闘に巻き込まれて亡くなった」との情報を流し、ヨルダンへ逃れてきたそうです。偽の情報を流したのは、単に脱走しただけでは、彼の家族や親戚に被害が及ぶと考えたからで、紛争前は反政府的な考えを特に抱いていなかったと考えられるアブドゥ氏も、聞き取り時にはアサド政権が打倒されなければならないと強い眼差しで語っていました。

現時点において、アサド大統領に代わる指導者はいるか、との問いに対して、別の若者フィラス氏（仮）は、「2千万人もシリア人がいるのだから、代わりとなる指導者がいない訳がない。我々シリア人の望みを反映させ、現政権関係者・アラウィー派でなければ誰でも構わない。」と興奮した口調で語りました。「アラウィー派でも政権と密接でない人たちもいるのでは」と問うと、「政府側がスンナ系ムスリム以外のアラウィー派を始めとした少数派に武器を配布した。アラウィー派は相手を殺さないと自分たちが殺される、との考えをもとに行動している。彼等を信頼することができない。」と言います。

シリア政府側が少数派の市民に対して武器を配布したとの情報は多く耳にしましたが、度々「宗派感の争い」として報道される虐殺事件等は、情報の真偽は分からず、政権側が人々の間に宗派間対立という恐怖を植えつけることで支持を取り戻す為の自作自演なのか、実際に宗派間の憎しみが広まっているのか、或いはその両方であるのかないのか、現状を把握することは困難です。

しかしながら、多様な宗教・民族的な背景を持つシリア人の結束を呼びかけ続け、宗派間の争いを否定する人々がいる中、凶悪な事件が多発するにつれ、他者に対する恐怖感が人々の間で確実に高まっていることは、悲しいながらも現実であると理解できます。

このような状況の中、今後現政権が続くか否かに関わらず、引き金が引かれてしまった争いから生まれる恐怖・猜疑心・憎しみの連鎖がはたして止まるのか、新しいシリアはどのように形成されていくのか、様々な懸念が山積しています。しかし、だからこそ、我々サダーカは、第三者としての立場を用いて、多様な背景を持つシリア人が今後も共生していけるような、豊かなシリアを再度築きなおす手助けの方法を模索し、行動していくことが重要であると考えています。

\*\*\*\*\*

サダーカではシリア難民支援を行う団体と情報の共有や協同でのアドボカシー活動を行っています。そのような団体の一つで、豊富な難民支援活動実績があるパレスチナ子どものキャンペーンがヨルダンで実施している活動記事を紹介します。

## (2) 認定NPO法人パレスチナ子どものキャンペーンヨルダン事業レポート

報告：プロジェクト・コーディネーター 持田 雄太郎

パレスチナ子どものキャンペーン（以下：CCP）は2012年8月よりヨルダンにおける活動を開始し、11月終わりから本格的にシリア難民支援を行ってきました。ヨルダンにおけるCCPの事業は物資配布や産科病院の支援、北部の難民キャンプにおける女性・子どものプログラムなど多岐に渡りますが、本稿ではCCPが行っている物資配布による越冬支援について紹介します。

CCPはヨルダンのシリア難民が、着のみ着のまま逃れてきたために厳しい冬を前にして非常に困窮していることを憂慮し、越冬支援として物資配布を行ってきました。難民家庭のホーム



CCPが配布するヒーターを受け取りに来た男の子とおばあさん



ヨルダン北部、シリア難民キャンプにて

ビジットを継続的に行っていますが、薄暗い空っぽの部屋の中で親と子供たちが身を寄せ合い、寒さに凍えながらも健気に日々生き繋ぐ姿に心を打たれることがしばしばあります。こうした家庭を対象にいままでにCCPは毛布、ヒーター、冬服、靴・靴下、ミルク、生理用品などの配布を行っており、裨益者は1500家庭近くにのぼります。

配布に際しては難民の方々が少しでも多くの物資を求めてきたり、最近新たに逃がれてきた難民が毎回飛び込みで物資を求めてきたりするなど、支援が非常に足りていないように感じます。CCPが訪問したある家庭には簡単な敷物以外の物資は全くないような状況であり、その晩をどのように過ごすかということで必死でした。またシリア難民は彼ら自身が大変過酷な環境にあるにもかかわらず、NGOなどから受け取った物資のうちいくらかを、さらに過酷な

環境下で暮らすシリアの家族のもとへ送っている場合もあります。

ヨルダンでは現在国連や多くのNGOなどがシリア難民を支援していますが、他方で一日約2千人単位の規模で押し寄せる難民を前に支援の必要性は切迫しています。CCPは今後も難民一人ひとりが温かく安心して日々を過ごすことができるようにシリア難民支援を継続していく予定です。



アンマン市内  
ミルク及び生理用品の配布時の様子

\*\*\*\*\*

### (3) シリア難民家庭を訪問して

(報告：早稲田大学文学学術院助手 赤司 千恵)

2013年1月13日から20日にかけて、ヨルダンを訪れました。目的は考古学の学会でしたが、会場がヨルダンでなければ参加しなかったかもしれません。アラブ圏に来るのは2年ぶりでした。

わたしは2006年から2010年にかけて10回以上シリアを訪れ、遺跡の発掘調査に参加しました。長い時は2カ月間滞在し、田舎の農村でにぎやかな作業員たちと働きました。ビザさえ取ってしまえば、シリアはふらっと行ける場所だったので、2年以上も行かずに過ごすことになるとは考えもしませんでした。

学会中、死海近郊の遺跡見学で通りかかった耕作地に、シリアナンバーのトラックが停まっていた。シリアは本来農業が盛んな国ですが、内戦のために現在はヨルダンから野菜などを輸入しているといえます。

一週間続いた学会が終わって、サダーカ代表の田村雅文さんをお願いをし、アンマンに暮らすシリア難民訪問に同行をさせていただきました。ヨルダンにいるシリア難民の中で、難民キャンプにいるのはわずか2割(当時)と聞いて驚きました。難民のほとんどは、アンマンなど都市部で生活しているため、その実数や状況を把握するのはほとんど不可能だといえます。ヨルダン人で以前からイラクやシリアからの難民支援を続けているアブー・ターレクさんの協力で、ロコミを頼りにシリア難民の家庭を一軒一軒訪ねて、家族構成や経済状況などについて聞き取り、支援金や物資を届けているとのことでした。

田村さんとともに3つのシリア難民家庭を訪問しました。アラビア語の簡単な挨拶さえなかなか出てこないことにショックを受けつつ、各戸で話を聞いたり写真を撮らせたりしてもらいました。難民のほとんどが女性と子供だということを改めて実感しました。男性が含まれていたのは一家族だけで、ある家族は女性2人と15人兄弟ということでした。

ガスや暖房設備などの状況は各家によって様々です。その日は比較的暖かかでしたが、ある家は日がまったく

当たっておらず、室内はひんやりとして、ガスもない「台所」では水タンクからの水漏れを受けるバケツが並べられ、暖房・調理の両方を薪ストーブ一つで賄い、割れた窓ガラスは一面テープで補修されていました。薄暗い庭先に洗濯物を干して、我々が訪ねた時は洗濯紐を持ち上げて家の中へ通してくれました。



訪問先の子どもたちと

その家の 15 人兄弟は、カメラを向けると恥ずかしそうに、でもくすくすと笑いながら集まってきました。シリア人はなかなか自然な姿を写真に撮らせてくれず、みんなカメラ目線でポーズをとる、ということ思い出して、変わらないところを見つけたことを嬉しく思いました。実際に自分の目で難民の現状を見ると、いろんなことが思い出されて感情があふれ出してしまうのではないかと心配でしたが、子供たちの笑顔が救いになりました。

我々の訪問を、シリア難民がどう受け取っているのかは分かりません。シリアでは、見ず知らずの人でも助け合うことは当たり前なので、日本からの支援も自然と受け入れるのかもしれない。ただ、個別訪問という方法を取ることで、少なくともシリアからすれば遠い極東の国の人間が、彼らの状況に関心を持っていることを直に知ってもらうことは、大きな意義があると思います。

考古学を通してシリアと関わってきた私のような外国人は、内戦が終わった後のことをすでに考え始めています。シリア各地の文化遺産が内戦による破壊を受けており、将来それらの修復や活用を行うため、情報収集や専門家育成を行っています。今回参加した世界考古学会でも、戦乱中の文化財保全に関するセッションが設けられ、シリアの文化財についても報告がされました。

多数の人命が失われているのに、文化遺産の保護を考えることに反発を感じる人もいるかもしれません。しかし、文化遺産を身近に感じながら生活してきた人々にとって、文化遺産を守ることは、自分たちの日常を守ることでもあります。たとえば世界遺産でもあるダマスカスやアレッポの旧市街は、地元住民の生活の場であることが最大の魅力です。観光客向けの作られた街並みではなく、市場では昔ながらのスパイス屋、肉屋、靴屋、金物屋などが軒を連ねていました。日本でも 3.11 の震災が、日常の大切さを改めて認識させ、その日常を取り戻すという意思が復興を支えているのと同様に、内戦という日本とは状況は違えども、厳しい環境の中で普段通りに働こうとする、または学校に行こうとする人々の話を聞き、シリアは絶対に復興できると確信しました。

今現在は考古学者としてシリアのために出来ることはわずかですが、今回シリア難民の家庭を訪ねて、思っていた以上に自分に出来ることはたくさんあるのではないかと感じました。シリアで調査をさせてもらった私にとっては、シリアの人たちから受けたすべて覚えきれないほどたくさんの親切を、少しでも返すのが義務だと思っています。

\*\*\*\*\*

#### (4) 寄付の状況

2012 年 12 月～2 月末までで、1,060,971 円のご寄付をいただきました。ご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。いただいたご寄付は引き続き東アンマン地域での物資配布等に使用させていただいております。詳細は後日ホームページを通じて報告させていただきます。

---

## 2. アハバールフロムニッポン 《日本での活動の報告》

---

### (1) 4月のイベントのお知らせ

下記2つのイベントが4月20日(土)と21日(日)に行われ、サダーカもブースを出します。同日開催ですが春のお散歩がてらにでも是非お立ち寄りください。

～第6回協力隊まつり～

【開催場所】TIC TOKYO(ティーアイシートウキョウ)イベントスペース

【アクセス】JR線：東京駅 日本橋口より徒歩1分 地下鉄：大手町駅 B7出口より徒歩2分

【開催日時】4月20日&21日 11時～17時(両日とも)

～アースデイ東京2013～

アースデイ東京2013のエコ雑貨ライフ展にて出展する“アレppoの石鱈”さんのブースにて共同出展させていただきます。ブース番号はE-10“アレppoの石鱈”です。

【開催場所】代々木公園(エコ雑貨ライフ展はNHKの周りのイベント広場からケヤキ並木区域の予定です)

【アクセス】JR線：原宿駅より徒歩3分 地下鉄：明治神宮駅より徒歩3分(代々木公園まで)

【開催日時】4月20日 10時～19時半 4月21日 10時～18時半

皆様のご来場をおまちしております！

☆☆

このメールマガジンは、勝手ながらこれまでシリア支援の関係でお会いした方々、ご支援を頂いている方々へお送りしております。今後の配信を希望されない方は、お手数ですが、以下までご一報を頂きますよう、お願い申し上げます。配信停止はこちらまで：[info@sadaqasyria.jp](mailto:info@sadaqasyria.jp)

なお、このメールの配信元の[akhbar@sadaqasyria.jp](mailto:akhbar@sadaqasyria.jp)は配信専用ですのでこのメールへの返信はできません。

☆☆